



TITLE:

彗星だより (倍大號)

AUTHOR(S):

CITATION:

彗星だより (倍大號). 天界 1926, 7(71): 65-66

ISSUE DATE:

1926-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161068>

RIGHT:

彗星だより

前號の本誌第590頁に記したコマス・ソラ氏発見の新彗星(1926 f)については、十一月十五日に中央局たるコペンハーゲン天文臺から二度目の電報が来た。(BULLETIN 第93號。)此の電文は

COMET COMASSOLA PARABOLA
MAY 14333 06248 05715 02457 17541
46294 PERIHELION 1927 EBELL
VINTERHANSEN

さいふのであつて、珍らしく此れは軌道要素を報告してよこしたものである。即ち之れを譯するに

『コマスソラ彗星の軌道は拋物線で、近日點通過は1927年5月14日 333 (萬國時)

近日點の引数は
62° 48'

昇交點の黃經は
57 15

軌道面の傾斜角は
24 57'

但し春分點1926.0 ので

近日點の距離は
1.7541 (天文單位)

此の軌道要素の計算者は Ebell 氏

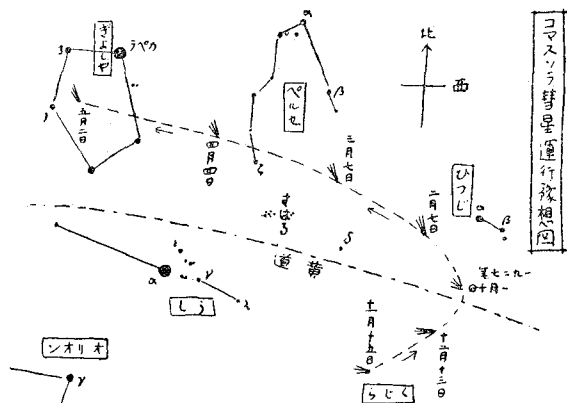
電報發信者はコペンハーゲンのフィンターハンセン氏』

電文中にある検査數46294 はよく合つてゐるから、上記の數値に誤りは無い。

此の軌道要素によつて京都の山本教授が今後の彗星位置を計算した所によるに、(精しくは本會ブレン第93號を見よ)、大體は

日附(萬國時)	赤經	赤緯	光度
年 月 日 h m s			
1926 11 15.5	2 46 8	+ 7°10.2	11.8
12 13.5	2 20 9	+10 0.6	11.6
1927 1 10.5	2 11 55	+14 36.6	11.5
2 7.5	2 28 13	+20 36.5	11.4
3 7.5	3 7 53	+27 25.2	11.3
4 4.5	4 10 47	+34 4.8	11.3
5 2.5	5 36 18	+38 50.0	11.3

となる。此れを星圖に畫いて見ると、彗星は、1926年の十一月中は、**くぢら座**の東北部を逆行してゐるが、十二月の初めに**ひつじ座**へ北上し、1927の一月元旦頃に黃道を北へ横切り、同時に毎日の運動は順行に轉じ、其の後は徐々に東北へ進みつゝ、火星のあとを追つて行く筈である。三月十日には**ペルセ座**に入り、四月中旬には更に進んで**ぎよしや座**に入る。此の期間、常に日没後の西天を賑はすことになる。地球への距離は十二月十日頃が最近で、其の後は少しづつ遠ざかるけれど、太陽と彗星との距離は五月十四日まで漸次近づく筈であつて、結局、彗星の光輝は五月中旬まで、極めて僅かづつ



ではあるが増して行く。そして近日點通過頃には十一等級ぐらゐになる見込みである。(途中で急變するこゝが無ければ。)故に10センチ以下の屈折望遠鏡では観測は困難であらうが、反射鏡ならば15センチ以上の口径のもので見える筈。——とにかく、此頃多數の彗星が発見される中にも、近日點通過の日より160日も前に発見されたのは可なり珍しい例である。尤も

1910年のハレイ星が近日點よりも220日前に、

1912年のナルフ彗星は240日前に

1914年のテラヴン彗星は800日前に
発見されたといふ例が無いではないが、
多分此のコマスソラ彗星は1927年の年末
頃まで観測されるであらう。

③さきに1925kの彗星を発見したギルク
氏(ポーランド國クラコフ大學天文臺の)
は、去る1923年九月一日21時46分(萬國
時)に

赤経 $15^h 53. m 2$ 赤緯 $+3^{\circ} 5'$ (1855年の
分點)の位置に彗星らしいものを一つ見
付けたといふ電報が歐洲の或る天文臺に
は送られた。星の光度は6.0等だったとい
ひ、又、之れは4分時間に1°づつ東へ
運動してゐたといふ報告なので、聞いた
人は皆驚いたが、其の後何の報告も無い
ので、多分之れは、何かの誤りか、又は
一流星の破片か、或は極光の一片であつ
たのかも知れない。(ちと古い話である
が、1916年五月四日にもペライン教授た
ちが、僅か数時間の間、天に同様な奇怪
なものを見たといひ、ミスEグランシー
は軌道計算までやつたことがあつたけれ
ど、やはり、誰も其の後之れを見なかつ
たので、之れが本統の天體であつたか否
かは今だに判明しないまゝになつてゐ
る。)

◎ニウツミン彗星 (1916 II) が近づいて
来た筈なので、「今にも誰かに発見され
るだらう」と、各國の學者は期待してゐ
る。此の彗星は1916年二月24日にロシ
アのニウツミン(Neujmin)氏が発見した
もので、同年の六月まで観測が行はれ、
其の結果、週期5.42年の彗星であること
が知れた。1921年には、地球との位置の
都合上、発見されなかつたが、此度は観
測に都合悪くないから発見は可能性が多
い。東京の神田氏からの報知によれば、
近日點通過は多分1927年一月八日らしく
其の豫想位置は、去る十一月頃はしゝ
座、同十二月にはおとめ座に入り、1927
年一月中、スピカ星の附近を西西南へ順
行中である。但し、光度は12等級の程度
であるから、60センチ以上の反射鏡で無
ければ観望は困難であらう。

◎近着報によればニウツミン彗星は発見
された。発見者は又ニウツミン氏、場所
はロシア國シメイス天文臺。時は1926年
十一月五日1時37.9分(萬國時)。星は
赤経 $10^h 10^m 56s$ 赤緯 $+18^{\circ} 29'$ 分點1926.0
光度は14.5。但し急激に増光しつつある。
近日點通過は1927年一月16.5日(萬國時)
に近い。本會アレテン第94號を見られよ。

消 息 と 雑 報

○木星の四衛星の變光 米國で天

體光度測定の大大家 J. Stebbins (ステビ
ンス氏——キスコンシン大學天文臺長) 氏
が、1926年の夏、カリフォニアのリク天
文臺に滞在し、精密な光電光度計 (Pho-
toelectric photometer) で観測したところ
によると、木星の四つのガリレオ衛星は
何れも多少の變光星であつて、其の變光
週期は公轉週期と等しいものらしい。即
ち、

衛星	週 期	變光の範圍
1	1.77 日	0.24 級
2	3.55	0.30

3	7.17	0.13
4	16.75	0.10

又、位相による變光は

第2衛星は	位相角1°につき	0.13等級
第3衛星	同	0.13
第4衛星	同	0.25
第1衛星	(観測不充分)	

しかるに

我が月は 位相角1°につき 0.11等級
である。要するに此の四つの衛星は種々
の點に於いて月と同様のものらしい。
(Pub. A. S. P. 225)